

不妊治療における子宮鏡下手術の有効性と分娩への影響についての検討

- 友崎 薫 1)、中岡 義晴 1)、下西 祥子 2)、福田 愛作 2)、森本 義晴 1)  
1)医療法人三慧会 IVF なんばクリニック  
2)医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック

〔目的〕 子宮腔内に子宮筋腫などの子宮内腔病変があると病変部血流障害や子宮内分泌物増加などにより着床環境の悪化をきたし、妊娠率低下と流産率の上昇を引き起こすとされている。それらの内腔病変に対しては、手術侵襲の少ない子宮鏡下手術が、良い適応となる。今回、子宮鏡下手術後の妊娠率、流産率、生産率さらに分娩に及ぼす影響についても検討した。

〔対象と方法〕 子宮鏡検査により内腔の異常（粘膜下筋腫 49 例、子宮内腔癒着 3 例、中隔子宮 2 例）が確認された 54 症例に対して 2004 年 2 月から 2011 年 11 月の間に当院で子宮鏡下子宮手術（子宮筋腫切除術、子宮内腔癒着剥離術、中隔切除術）を行った。女性の手術時平均年齢は 38.1 歳(30 歳～50 歳)で、手術後の治療は一般治療 13 例、体外受精胚移植 38 例、その他 3 例であった。手術の有効性については妊娠率、流産率、生産率で評価した。

〔結果〕 手術前に 43 症例中 17 例で妊娠歴があり、総妊娠数 27 例中 74.0%(20/27)が流産であった。手術後の妊娠率は全体で 46.3%(25/54)、年齢別では 34 歳以下 70%(7/10)、35 歳から 39 歳 54.5%(12/22)、40 歳以上 27.3%(6/22)であった。妊娠予後が判っている 17 症例中 13 例(72.2%)が出産、4 例(27.8%)が流産となった。流産率は、34 歳以下 0%(0/4)、34 歳から 39 歳 37.5%(3/8)、40 歳以上 20.0%(1/5)であった。

13 症例の分娩様式については、帝王切開 8 例(61.5%)、経膣分娩 5 例(38.5%)であった。そのうち帝王切開 1 例で出血多量で輸血、経膣分娩で弛緩出血 1 例、常位胎盤早期剥離 1 例の分娩時異常が認められた。

〔考察〕 手術後は手術前と比較し流産率は有意に低下した。手術が影響した可能性のある分娩時の障害として常位胎盤早期剥離が 1 例(7.7%)のみで頻度が高いとはいえないことがわかった。